

http://www.minamih.net/



12・10・6(土)
南NEWS NO40

漢字練習ノート配布

後援会より子ども達へのプレゼントです。
隣国に生まれた先人の知恵・文化遺産である漢字。漢字の成り立ち(字源)を知ることにより、昔の人の知恵に共感し、生活の様子・歴史も学ぶことができる漢字練習ノートです。口唱法により漢字の書き順もしっかりと覚えられます。お家で毎日何文字かずつ取り組んで、自宅学習の習慣化につながればと願っております。

読み方・書き順と使い方(熟語)を覚え、練習して“さあテスト”という漢字学習ではなかなかできない文化遺産の豊かな継承になる漢字練習ノートです。

“世界にたった一つしかない漢字辞典”作りにも取り組みれば漢字学習はより楽しく完璧になります。

b y 南のアンパンマン

★刊行時に寄せられた著者下村氏のメッセージです

- (1)「よこぼうで 左にはらって 右ばらい」は なあんだ?……(大)
- (2)「てん 一(いち) ソ 一(いち)」は なあんだ?……(立)
- (3)「たて かぎ よこ よこ したに十(じゅう)」は なあんだ?……(早)

漢字のクイズ? そう思ってくださいっても結構ですが、じつは「口唱法」という、「漢字の書き順学習」の方法です。口唱法を用いて『下村式 唱えておぼえる 漢字の本』(学年別・全6巻)をつくったのは、もう約30年も前ですが、この本は、時をこえて、多くの子どもたちに愛され、今でも読み継がれています。

しかし、『漢字の本』がでたあと、子どもたちからはすぐに、「まだ、たりないものがあるよ」という意見をもらいました。それは「子どもにもわかりやすい意味」の書いてある漢字辞典がないということでした。わたしはすぐに、子どもが使えて、子どもに役だつ辞典、『下村式 小学漢字学習辞典』をつくりました。

ところがまたまた、子どもたちからは続々と意見がきたのです。「書き順のおぼえかたはわかりやすいし、漢字のできかたや意味もおもしろい……でも、せっかくおぼえた書き順や意味も、練習しないと忘れちゃうよ」

このような子どもたちの声におされて生まれたのが、今回の、『下村式 となえて書く 漢字練習ノート』です。

漢字にかぎらず、文字の始筆(第一筆目)は、「一」「丨」「ノ」「丶」の4種類しかありません。そうしたことを知ったうえで、口唱法で書き順をおぼえれば、どんな字でも正しく美しく書けるようになります。不幸にも、書き順をまちがっておぼえてしまった子(でたらめな書き順が直らない子)にも、口唱法は有効です。

まよわずに、この画期的な『漢字練習ノート』で、お子さまに漢字のおさらいをさせてみてください。(下村 昇)



矢上は5年前、縁あって横山二小の4年生の担任になりました。その時担任していた本が大好きという女の子の日記です。

横二小4年2組 学級通信 どの子も

NO16 07・11・28(金)より

私は国語の漢字が好きです

4年生 女子

漢字は生活の中で役立っているし、でき方が分かっていけばとても覚えるのが楽しいし、楽に覚えられます。

漢字のでき方は、昔の人の知恵からだんだん出てくるから、昔の人がどういう生活をしていたりするのかがよく分かります。昔の人は(いろいろ苦労したんだなあ)と思いました。漢字は昔の人の苦労を知っていて、教えてくれるようです。

漢字のでき方が分かったら、意味や読み方がよく分かるから、でき方が分かった方がいいともいます。

人が流されている絵からなどこわいでき方があるけど、本当の話で(こういうこともあったんだなあ)と思います。

漢字をもっと習い、でき方もわかるようになりたい。
昔の人はすごい!!

…漢字の成り立ち(でき方)を学習すると、昔の人の知恵って素晴らしいなと本当に思いますね。昔の人の生活の様子もよく分かって楽しいですね。

漢字は先人が残してくれた文化遺産ですね。しっかり受け継いでいきたいですね。

明日 5年生 第24回 JA東京カップ 東京都5年生大会12ブロック予選

文化大G

日頃の練習の成果を出し切ることができれば1次リーグ突破の可能性は十分にあります。

今日練習が終わって家に帰ったら、GAMBAノートに自分のめあて・チームのめあてをしっかりと記入して下さい。

③ 11:40 対 鎌水 SC

⑤ 13:20 対 平山 SC



ドリブル・ターン、パスアンドムーブ、オーバーラップ、コーチング、取られたら取り返す粘り等、よりレベルの高いパフォーマンスができるようにGAMBAりましょう。

“どんなプレーヤーになりたいか、自分達はどんなサッカーを創りたいのか”を確かめ合って、めざすサッカーの創造へ一歩でも二歩でも進んでいきましょう!!

b y 南のアンパンマン

ことばによる指導の大切さ
……自信を得ることばと、自信を失うことば p16～19

静岡県教育文化研究所 大野木龍太郎

○ほめてから考えさせる

最近よく言われる「ほめて育てる」ことばかけですが、単にできたことだけをほめるのではなく、できないことへのチャレンジをほめる、過去から見てのびた部分をほめる（自己内評価）、他者への貢献（アシスト）という面からほめるなど、ほめる場面はたくさん転がっています。しかし、ほめられることを通して育ててこなかった親にとっては、叱られることが指導だと考えてしまいがちです。それは、できない部分をあぶり出し、その欠点を指摘し、それを克服させることこそ最重要だと考えています。「今の自分に満足するな」「上にはい上がる」「人より少しでも多く練習しろ」など、相対評価と練習の量に還元する傾向が、今も根強くあります。

子どもとスポーツの関わりは、内的要求に支えられ、「好きだから」という感情をベースにしていきたいものです。でも結果を優先すると（というか、それを求めているのは指導者であったり親であったりするんですが）、失敗を恐れ、のびのびとプレーする機会を失いがちになります。子どもはその時々プレーそのものを楽しめるようにしてあげたいものです。

そのためにかけてほしいことばは、「惜しかったね」「結果はパーフェクトではなかったけれど、いいチャレンジだったね」、そうすると子どもはまちがいをニコニコします。笑顔を浮かべているのは「またやってみよう」と前向きになっている証拠です。自分がやったことが認められたことに対して、喜びを覚えているわけです。子どもが「次はどうしたらいいかな」と考え始めるエネルギーに変わっていきます。

特に小学校低学年の頃は、親や指導者から自分がやったことをほめられると嬉しいのです。試合でゴールを決めたとか、テストで100点取ったという結果ではなく、そのプロセスをほめる習慣をつけたいですね。そのプロセスとは、「難しいことなのに、すごく楽しそうにチャレンジしている」と見られるようになることです。

それなのに大人はつい否定してしまいます。そうなってしまうのは、欠点ばかりが目がいっているからです。悪いところを見つけて修正することが指導だと思こんでいるからではないでしょうか。

たとえば「この子は足が遅いから、ゴールキーパーにしよう」という消去法的発想です。これは欧州の教育観との差を大きく感じる場所です。長所を生かすために、どうしたらいいかヒントを与え、子ども自身に考えさせる経験を積み重ねていけば、子どもは知らない間に自立していきます。そのバックには、「自分のやろうとしていることを認めてくれている」という自己肯定感を獲得していくのです。